

有配偶者のサポート構造

大日 義晴

(首都大学東京大学院人文科学研究科)

【要旨】

本稿では、有配偶者のサポート構造とその特性を検討した。まず、女性は夫以外のサポートに恵まれているが、夫からのサポートが少なかった。逆に男性は妻以外のサポートに恵まれていないが、妻からのサポートが多かった。ただしこの性差は、情緒的サポートと病気時サポートにおいてのみ確認された。次に、有配偶者にとって夫や妻からのサポートは、その他のサポート源に比べて、サポートの種別にかかわらず最も利用可能性が高かった。また配偶者のサポート利用可能性は、ライフステージを通じて安定的に高かった。つづいて、配偶者のサポートの有無が、配偶者以外のサポートの利用可能性にもたらす影響について、すなわち双方のサポートの関係は、相互排他的なのか、あるいは両立・補完的なのか検討した。まず金銭的サポートについては、配偶者のサポートがなければ、その他のサポート源の利用可能性が高くなる、という相互排他性が確認された。一方、情緒的サポートと病気時サポートについては、配偶者のサポートの存在が、その他のサポート利用可能性を高めており、両立・補完性が確認された（男性の情緒的サポートについては除く）。しかし、配偶者以外いずれか1つ以上のサポートの利用可能性の有無についてみると、サポートの種別にかかわらず、配偶者のサポートの欠如は、その他のサポート源の利用可能性を高めていた。また女性は再婚によって、サポートの種別に関係なく、配偶者以外のサポート利用可能性の低下を経験することが示唆された。

キーワード：ソーシャル・サポート、配偶者のサポート、配偶者以外のサポート、ライフステージ、性差

1. はじめに

本稿の目的は、配偶者に期待されるサポート機能の相対的な特徴に着目し、有配偶者のサポート構造を検討することである。有配偶者が夫や妻に期待するサポートの特性を明らかにすることは、配偶者のサポートが、親子関係や友人関係のような、配偶者以外の社会関係から得られるサポートとどのように区別しうるのかという問いに答える上での一助となりうる。配偶者に期待されるサポートを明らかにすることは、配偶者というサポート源を得ること、ひいてはわれわれの社会において結婚を選択することが、つまるところ何をもちうるのかという、いわば家族研究の中心的課題のひとつであると位置づけられる。

1.1 配偶者のサポートと配偶者以外のサポートの関係

有配偶者にとって、身近なパートナーである配偶者は、様々な局面において最も優先的にサポートが期待される存在であり、それ以外のサポート源からのサポートでは、配偶者のサポートの欠如を代替し得ないことが指摘されている(Cutrona 1996)。しかしその一方で、配偶者以外のサポートは無価値なわけではなく、補完的な機能や独自の機能を持ちうることも指摘されてきている。近年の家族研究における、配偶者のサポート（もしくは、やや範囲を拡大して家族内サポート）と、それ以外のサポートとの関係について以下で簡単に整理してみよう。

大和（2009）は「家族・親族からの援助を期待する人は、専門機関からの援助を期待しないのか」という問いについて、「相互排他性説」と「両立・補完性説」という異なる二通りの考え方を取り上げている。前者は、一方を充実させることで他方が弱体化するという仮説であり、後者は、文字通り両者は両立し、相互に補い合う関係にあるという仮説である。そしてNFRJ03データを用いた分析の結果、援助の種類によってそれぞれ支持される仮説が異なることが示された。すなわち「人手が必要」な場合には、家族・親族への援助期待と専門機関への援助期待は「両立・補完的」であり、一方「お金を借りる」場合には両者への期待は「相互排他的」であった。

野沢（1999）は、夫婦間の情緒的依存とネットワークの規模や援助性との正の相関を示すことを指摘している。また野沢（2001）は、世帯外ネットワークの規模と家族間の紐帯の強さとの関係を検討し、夫、妻、子のそれぞれが、援助的で親密な相手との関係を世帯外に広げるとは、世帯内の連帯と競合あるいは代替するのではなく、むしろ強める点を指摘している。上述の大和の分類に当てはめると「両立・補完性説」に該当する。

また高齢者研究において、高齢期に誰にサポートを期待するのかに着目した研究が積み重ねられてきている（野邊 2005; 小林 2008）。高齢者がサポートを入手するメカニズムとして、主に「階層的代償モデル」と「課題特定モデル」の二つのモデルが提起されている。「階層的代償モデル」は、サポートの種類にかかわらず、高齢者がサポートを求める相手には序列が存在すると考える。優先順位が高い人がサポートを提供できない場合、次位にある人がサポートの機能を代替すると考える（Cantor 1979）。日本においては、高齢者がサポートを期待する相手として、配偶者があげられる傾向がある。これに対して「課題特定モデル」は、課題の性質により、より合理的なサポート相手が存在すると想定する（Litwak & Szelenyi 1969）。例えば友人関係は、情緒的サポートの提供源として配偶者より適合的であると考えられうる。ただし、両モデル共に、各サポート源からのサポートが両立することはあまり想定しておらず、サポートの相互排他性を想定している点では共通している分析モデルと言える。

吉原（2006）は、きょうだいが情緒的サポート源として選択されるのは、配偶者や子どものサポート源が得られない場合と言えるのか、NFRJ03のデータを用いて階層的代償モデルについて検討しており、一部については本モデルが当てはまることを示している。

他にも相互排他性説に該当する研究として、恋愛パートナーを持つことによって、そのパートナー以外の他者からのサポートを得ることをためらうようになることを指摘した研究があげられる（相馬・浦 2007）。

配偶者のサポートと配偶者以外のサポートとの関係について検討する上で、先行研究の知見から示唆されるポイントは、以下の通りである。それは、①配偶者以外のサポートの独自機能の有無、②配偶者のサポートと配偶者以外のサポートの相互排他性と両立・補完性、の二点である。よって、本稿の主要な問いは以下の通りまとめることができる。第一に、有配偶者にとって配偶者は、サポートの種別にかかわらず最も中心的なサポート源であるのか、あるいはサポートの種別によっては配偶者以外のサポート源の方がより期待されるのか。第二に、配偶者のサポートの存在は、配偶者以外のサポート利用可能性を高めるのだろうか、それとも低めるのだろうか。

1.2 サポートのパターン：ライフステージ移行と性差

Antonucci (1985) は、個人のソーシャル・サポートとライフコースとの関係について、コンボイ・モデルによる説明を提唱している。このモデルは、ある個人のソーシャル・サポートの布置状況を、その個人を中心として同心円状に広がる三層に囲まれた図で表す。そして個人にとってそれぞれの社会関係がどのような特性をもっているかに応じて、各層に区分される。最も内側の円には役割依存的ではない、ライフステージを通して安定的で、個人にとって最も親密な関係が含まれる。具体的には配偶者や親友などが想定されている。これに対して最も外側の円には役割関係と直接関連し、役割変化の影響を最も受けやすい関係が含まれる。この整理は Clark & Mills (1979) の共同的关系と交換的关系と重なる類型だと理解しても差し支えないだろう。

つまり夫婦関係は、相手のニーズの充足のため、相互的なサポート提供について責任をもつ関係として特徴づけられる。よって配偶者のサポートは他の関係からのサポートに比べて、ほぼ生涯を通じて安定して期待することができるモデルである。一方で配偶者以外のサポートはライフステージ移行に伴い変化しやすいことが想定される。

また、配偶者およびそれ以外に対するサポート期待には、性差があることが指摘されている。稲葉 (1998, 2002) は、結婚がもたらす心理的メリットを解釈する上で、「ネットワーク構造仮説」を提唱している。つまり女性が他者にケアを提供するというケア行動規範を社会化の過程で身につけていることを前提とした上で、個人は同性中心の対人ネットワークを形成すると考える。よって男性はケアを提供してくれるネットワークに恵まれておらず、逆に女性はケアを提供してくれるネットワークに恵まれていると考える。その一方で、夫が妻から受け取るサポートは、妻が夫から受け取るサポートより多いため、男性は女性よりも結婚によって得られるメリットが大きいと考える仮説である。

以上の先行研究の知見をふまえた上で、以下ではまずサポート期待の性差を確認した上で、配偶者のサポートと配偶者以外のサポートの関係について分析を行う。この際、ライ

フステージの移行に伴いそれぞれのサポート利用可能性のパターンがどのように変化するかについても検討する。

2. 仮説と分析方法

2.1 仮説

本稿で検討する仮説は、以下の五つである。

仮説 1：女性は、配偶者以外のサポートに恵まれているが、配偶者のサポートが少ない。

逆に男性は配偶者以外のサポートに恵まれていないが、配偶者のサポートが多い。

仮説 2：配偶者以外のサポートよりも、配偶者のサポートに対する期待の方が大きい。

仮説 3：配偶者のサポートは配偶者以外のサポートに比べて、ライフステージを通じて、安定して期待できる。

仮説 4：配偶者以外のサポートは、配偶者のサポートが期待できない場合に、その代替として期待が大きくなる。

仮説 5：配偶者のサポートが恵まれていれば、配偶者以外のサポートも大きくなり相互に補完し合う。

仮説 3 は上述の課題特定モデルを直接検証するものである。つまりサポートの種別によっては、配偶者から分離・独立したサポート構造が存在するのか確認する。仮説 4 と仮説 5 は、配偶者のサポートが配偶者以外のサポートに及ぼす効果が逆であり、双方は相反する仮説であると言える。

2.2 データと変数

本稿では NFRJ08 データを使用し、有配偶者を分析対象とする。

分析で使用する変数は以下の通りである。まずサポートについては、サポート利用可能性の項目を使用する。NFRJ08 においてサポートの利用可能性は、「あなたは、次の（ア）～（ウ）のような問題で援助や相談相手がほしいとき、どのような人や機関を頼りにしますか。それぞれの場合について、あてはまるものに○をつけてください。（それぞれ○はいくつでも）」という設問で尋ね、「配偶者」、「自分の親」、「自分の兄弟姉妹」、「自分の子ども」、「配偶者の親」、「配偶者の兄弟姉妹」、「子どもの配偶者」、「その他の親族」、「友人や職場の同僚」、「近所（地域）の人」、「専門家やサービス機関」、「誰もいない」の中から回答者が選択する形式を採っている。本稿で扱うサポートは、サポートの機能別に、（ア）「問題を抱えて、落ち込んだり、混乱したとき」、（イ）「急いでお金（30万円程度）を借りなければならないとき」、（ウ）「あなたや家族の誰かが病気や事故で、どうしても人手が必要なとき」、の三種類である。以下では便宜的に（ア）を「情緒的サポート」、（イ）を「金銭的

サポート」、(ウ)を「病気時サポート」と呼ぶことにする。各サポートについて、頼りにできる人物として「配偶者」が回答されていれば、「配偶者のサポート」=1、とした。また「配偶者以外のサポート」は、「配偶者」と「誰もいない」を除いた残り10項目の得点を合算した合成変数を使用した。

NFRJ08において、本設問以外で情緒的サポートを測定している項目との関係について、若干の説明が必要だろう。問7付問17で、配偶者の情緒的サポートについての評価を尋ねている。「配偶者は、わたしの心配ごとや悩みごとを聞いてくれる」、「配偶者は、わたしの能力や努力を高く評価してくれる」「配偶者は、わたしに助言やアドバイスをしてくれる」の三項目それぞれについて、四件法で測定している。先行研究では配偶者の情緒的サポートとしてこちらの項目も用いられている。ちなみにこの三項目と前述の問17のサポート利用可能性(配偶者に情緒的サポートを期待できる)との相関は¹、それぞれ.374、.301、.354であり、同じく情緒的サポートを測定した項目としてはそれほど相関が高いとは言えない。これは情緒的サポートの別の次元を測定しているといえるかもしれない。

ライフステージについては、存命中の末子年齢で段階を設定した。「子どもなし」、「0-6歳」、「7-12歳」、「13-18歳」、「19-24歳」、「25-30歳」、「31-39歳」、「40歳以上」の8つのカテゴリーを用いた。ただこのうち「子どもなし」は結婚年数が長いグループも含むため、結婚五年以下に限定し、それより結婚年数が長いものは分析から除外した。加えて初婚継続と再婚との相違を考慮するため、「再婚経験ダミー」(再婚を経験していれば「1」)の変数を併せて用いた。回答者の社会経済的地位については「世帯年収」の変数を用いる。「収入はなかった」=0、「100万円未満」=50、「1600万円以上」=1650とし、その他については各カテゴリーの中央値を与えた。また就業時と非就業時における、配偶者以外のサポート構造の大小を考慮するため、「非就業ダミー」(調査時点で仕事に就いていなければ「1」)の変数を用いた。

3. 分析結果

まず、配偶者および配偶者以外のサポート利用可能性における性差について確認する。表1は配偶者に期待する各サポートの利用可能性について、男女別に示した表である。

情緒的サポートと病気時サポートについては、男性の方が女性に比べて有意に高かった。一方で、金銭的サポートについては性差が確認できなかった。つづいて表2は、配偶者以外に期待する各サポートの利用可能性について、男女別に示した表である。これによると、女性は男性に比べて、配偶者以外からのサポートをより多様に期待できることが分かる。とりわけ情緒的サポートについてはやや性差が大きいと言える。よって女性は、夫以外のサポートに恵まれているが、夫のサポートが少なく、一方男性は妻以外のサポートに恵まれていな

¹ 設問においては、得点が小さいほど「あてはまる」、大きいほど「あてはまらない」となっているが、ここでは分かりやすくするため得点を逆転した上で相関を求めた。

いが、妻のサポートが多いことが確認できる。ただし、金銭的サポートについては性差が十分に確認できなかった。以上の結果は先行研究の知見と一致し、仮説1は支持されると言える。男性と女性ではサポート構造の特性が異なると考えられるため、以下の各分析においては男女別に分析を行う。

表1 男女別配偶者サポート利用可能性

| 性別 | 情緒的サポート | | 金銭的サポート | | 病気時サポート | |
|----|---------|------|---------|------|---------|------|
| | Mean | SD | Mean | SD | Mean | SD |
| 男性 | 0.84 | 0.37 | 0.55 | 0.50 | 0.67 | 0.47 |
| 女性 | 0.80 | 0.40 | 0.56 | 0.50 | 0.64 | 0.48 |
| 全体 | 0.81 | 0.39 | 0.56 | 0.50 | 0.65 | 0.48 |

*

表2 男女別配偶者以外のサポート利用可能性

| 性別 | 情緒的サポート | | 金銭的サポート | | 病気時サポート | |
|----|---------|------|---------|------|---------|------|
| | Mean | SD | Mean | SD | Mean | SD |
| 男性 | 1.08 | 1.21 | 0.98 | 0.89 | 1.73 | 1.45 |
| 女性 | 1.66 | 1.38 | 1.03 | 0.90 | 1.93 | 1.37 |
| 全体 | 1.38 | 1.34 | 1.01 | 0.89 | 1.83 | 1.41 |

†

ひきつづき、有配偶者のサポート構造について、各サポート源別に確認する。図1～3に、各サポート源を期待する割合を男女別に示した。

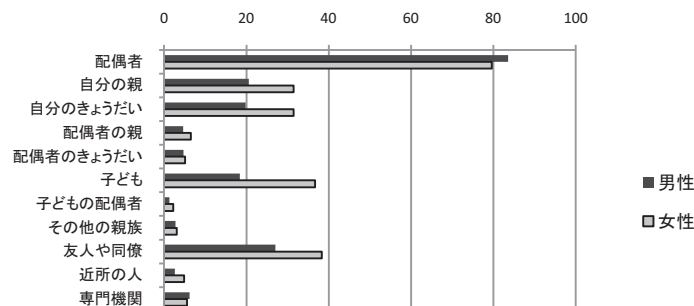


図1 サポート源別利用可能性(情緒的)

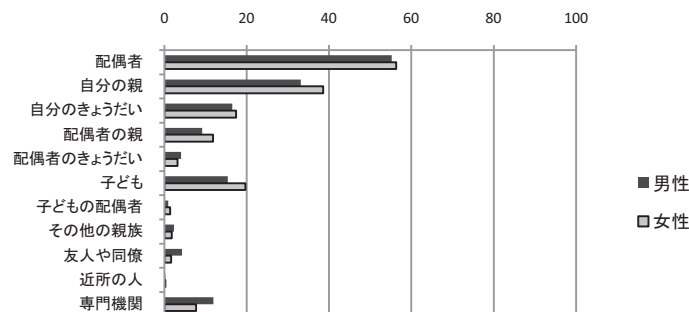


図2 サポート源別利用可能性(金銭的)

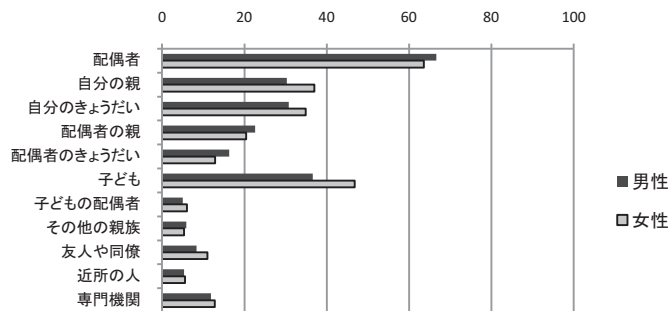


図3 サポート源別利用可能性(病気時)

それぞれのサポート種別に多少異なるが、配偶者が他のサポート源に比して抜きんでて高い割合を示す点では一致している。とりわけ図 1 の情緒的サポートについては男女ともに 80%程度の高い割合を示していることが分かる。配偶者に続いてその割合が大きいの、自分の親、自分のきょうだい、子ども、友人や同僚などであり、その傾向は男女同様である。しかし、女性の方が男性よりも配偶者以外のサポートに恵まれていることが確認できる。金銭的サポートおよび病気時サポートについて見ると、配偶者以外のサポートの中では、自分の親、子ども、きょうだいに期待する割合が高い。情緒的サポートと比較すると、専門機関に期待する割合が高く、逆に友人や同僚に期待する割合が低いと言える。以上から、有配偶者にとって夫や妻からのサポートは、サポートの種別にかかわらず最も中心的なサポート源であること分かる。逆に言えば、課題特定モデルが示唆する想定、すなわち配偶者と同程度、もしくは配偶者以上に期待されるようなサポート源は、サポートの種別にかかわらず見出すことができないと言えよう。この配偶者中心的なサポート構造のあり方は仮説 2 を支持するものである。よってコンボイ・モデルにおいて想定されるように、配偶者を最も内側の層に据えた同心円状に広がるサポート構造を描くことができるかもしれない。前述の通り、コンボイ・モデルを特徴づけるポイントは、個人のサポート構造をライフステージ移行に伴う発達的变化から捉える点にあった。以下では配偶者および配偶者以外のサポート期待の変動過程について検討する。

図 4~6 は、男女別に配偶者以外のサポートの総数が、ライフステージ移行に伴いどのような変化をたどるか示した図である。

まず三つのサポート種別に共通して見て取れるのは、各グラフが右肩下がりが気味である点であろう。ここから、配偶者以外のサポートは程度の差こそあれ、ライフステージ移行に伴い縮小していく傾向があると言えよう。図 4 の情緒的サポートについてみると、男女で非常に大きく異なる変化を示すことが分かる。結婚後早い段階においては性差が大きく、女性の方が配偶者以外のサポートをより多く期待できることが分かる。しかしながら、中期以降その差が次第に小さくなっていき、後期にいたってその差は無くなる。一方男性は生涯を通じて配偶者以外のサポートの総数がほとんど変化しないと言える。つづいて図 5 の金銭的サポートについて見てみると、男女ともにライフステージ移行に伴い、やや小さ

くなるが、大きく変化しないことが分かる。他の二種のサポートと比べると性差もほとんど見受けられない。次に図 6 の病気時サポートについて見てみると、女性の方が男性に比して一貫して配偶者以外のサポートに恵まれているが、男女ともにサポートが縮小していく過程が見てとれる。

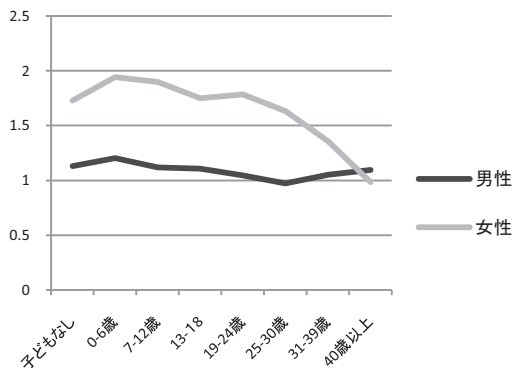


図4 配偶者以外のサポート推移:情緒的

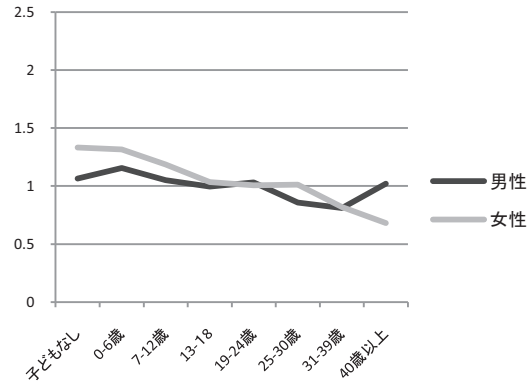


図5 配偶者以外のサポート推移:金銭的

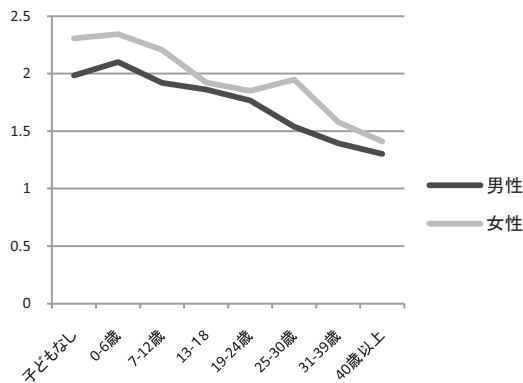


図6 配偶者以外のサポート推移:病気時

ここまで確認した配偶者以外のサポートの発達的变化について、サポート源の構成の変化を見ることでもう少し詳しく検討しよう。三種のサポートそれぞれについて確認したところ、サポート源の構成変化に著しい差異は見られなかったため、三つのサポートのうち情緒的サポートのみ図示する。サポート源のうち、上位五つ（配偶者、自分の親、子ども、自分のきょうだい、友人や同僚）を取り上げる。図 7 は男性、図 8 は女性についてのグラフである。

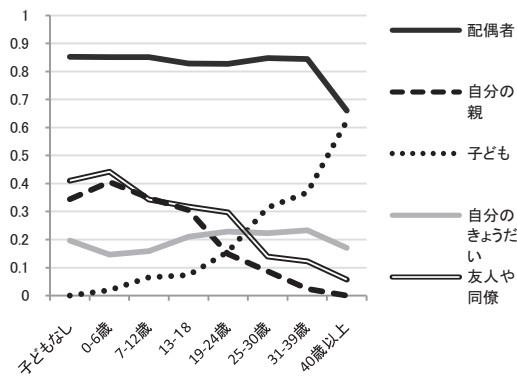


図7 サポート源別推移:情緒的(男性)

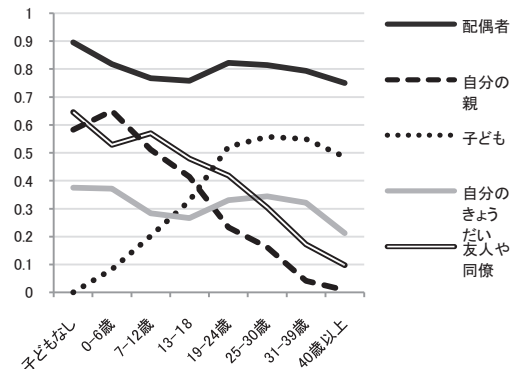


図8 サポート源別推移:情緒的(女性)

まず指摘できるのは、男女ともに利用可能性が大きく変化するサポート源と、比較的安定的にサポートを期待できる群に二分できる点である。配偶者と自分のきょうだいについては大きな変化を示さない（男女ともに配偶者のサポートはライフステージ間で有意な差がなかった）。その一方で、自分の親、友人や同僚からのサポートは、末子が小さい段階では重要なサポート源であるが、ライフステージ移行に伴い次第に縮小していく。これとは逆に子どもは、子どもの年齢が上がるにしたがって重要なサポート源となっていく、ちょうど末子が成人する段階あたりで、自分の親・友人や同僚と逆転していることが分かる。ここまで指摘した特徴は情緒的サポート以外の、金銭的サポートおよび病気時サポートについても概ね類似した傾向がうかがえる。ただし図2と3で見たとおり、この二種のサポートにおいて、友人や同僚はそもそもサポート源として期待できる割合が小さい。

図7と図8の相違点である性差について触れておく。まず男性の方がより配偶者中心的なサポート構造を示していると言えよう。一方女性にとって、末子年齢が低いうちは、自分の親や友人同僚は配偶者に続いて大きなサポート源であることが分かる。図4で示した通り、女性はライフステージ移行に伴い、配偶者以外のサポートの大きな落ち込みを経験する。図8からその原因を解釈するなら、第一に当初豊かであった自分の親や友人のサポートがその後大きく減少すること、第二に、子どものサポートが子どもの成人期あたりを境に上げ止まりになり、その他のサポートの減少分（とりわけ友人や同僚のサポート）が十分に補完できないことが考えられる。

以上の結果から、配偶者のサポートは配偶者以外のサポートに比べて、ライフステージを通じて、安定的に期待できることが確認できた。よって仮説3は支持されると言える。

つづいて、配偶者のサポートの有無が、配偶者以外のサポートの利用可能性の大小に影響を与えるメカニズムについて確認していきたい。図9～11は配偶者のサポート有無別に、配偶者以外のサポートの合計を示した図である。

このうち図9の男性の情緒的サポートについては、有意な差は確認できなかった（ただし有意傾向はあり）。その他はすべて、配偶者のサポートが期待できるグループとそうでな

いグループ間において、有意差が確認できた。ただしその差異はサポートの種類に応じて異なる。まず情緒的サポート（女性のみ）と病気時サポートについては、配偶者のサポートが存在することによって、配偶者以外のサポートも多様になるという、両立・補完性説が当てはまることが確認できる。これとは逆に、金銭的サポートについては、配偶者のサポートがあることによって、配偶者以外のサポート利用可能性が小さくなっており、相互排他性説に該当する。

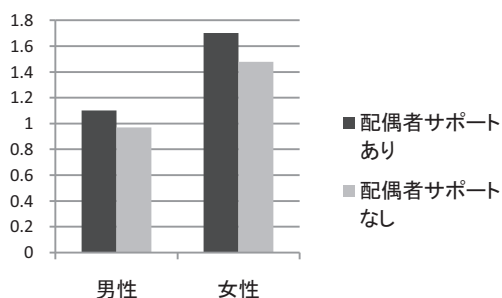


図9 配偶者サポート有無別
配偶者以外のサポート合計(情緒的)

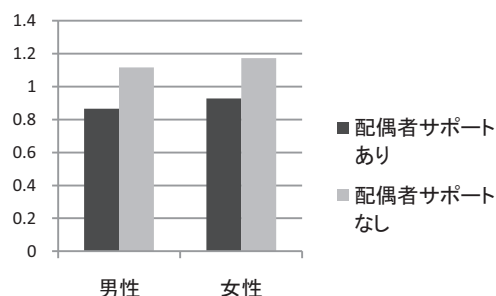


図10 配偶者サポート有無別
配偶者以外のサポート合計(金銭的)

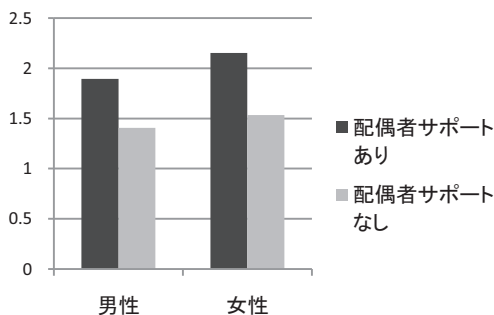


図11 配偶者サポート有無別
配偶者以外のサポート合計(病気時)

ただし以下の点は留意すべきである。配偶者以外のサポートについて、合算した総数ではなく、配偶者以外の各サポート源のうち、いずれか1つ以上について期待できるか否か（つまり、配偶者以外のサポートの有無）という変数を用いたところ、上記と異なった結果が得られた。つまり、この方法をとると、配偶者のサポートを期待できないグループの方が、期待できるグループよりも、配偶者以外のサポートの利用可能性が高いという結果が、男女ともにサポートの種別にかかわらず確認できた。この結果からはサポートの種別に関係なく相互排他性仮説が支持されることになる。つまり情緒的サポート（ただし女

性のみ)と病気時サポートについては、変数の設定次第で、相互排他性説と両立補完性説が両方とも成り立つことになる。

この一見逆説的な結果は、以下のように説明できる。配偶者のサポートが無いグループにおいては、配偶者以外に誰にも頼る人がいない層は非常に少ない。かつ配偶者以外のサポート総数の分散が小さい。つまり配偶者のサポートが無い場合、配偶者に代わって利用可能なサポート源は、存在しても多くはない。一方、配偶者のサポートがあるグループは、配偶者以外のサポート総数の分散が大きい。つまり配偶者のサポートがあるグループには、配偶者以外に誰にもサポートを期待できない(配偶者が唯一のサポート源)人たちが一定数存在し、くわえて多様なサポートを持つ層も存在するためであると考えられる。なお、実際に各分散を確認したところ、この説明と矛盾しない結果が得られた。

最後に各サポート種別に、配偶者以外のサポート合計を従属変数とした重回帰分析を行った。結果は以下の表3の通りである。

表3 配偶者以外のサポート合計を従属変数とした重回帰分析の結果

| 独立変数 | 標準化編回帰係数 | | | | | |
|----------------------|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| | 情緒的サポート | | 金銭的サポート | | 病気時サポート | |
| | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 |
| 世帯年収 | .090 ** | .064 * | .052 † | .003 | .075 ** | .045 † |
| 非就業ダミー(=1) | .032 | -.011 | .022 | -.020 | .003 | -.005 |
| 再婚経験(=1) | -.038 | -.072 ** | -.053 * | -.077 ** | -.041 | -.049 * |
| 末子年齢 (ref.末子0-6歳) | | | | | | |
| 子どもなし(=1) | -.023 | -.027 | -.006 | .015 | -.022 | -.010 |
| 末子7-12歳(=1) | -.022 | .008 | -.031 | -.051 | -.048 | -.025 |
| 末子13-18歳(=1) | -.040 | -.033 | -.067 * | -.099 ** | -.075 * | -.084 ** |
| 末子19-24歳(=1) | -.049 | -.034 | -.036 | -.089 ** | -.094 ** | -.122 *** |
| 末子25-30歳(=1) | -.057 † | -.063 * | -.106 *** | -.102 *** | -.124 *** | -.076 ** |
| 末子31-39歳(=1) | -.028 | -.137 *** | -.144 *** | -.203 *** | -.169 *** | -.177 *** |
| 末子40歳以上(=1) | -.018 | -.155 *** | -.023 | -.168 *** | -.073 ** | -.118 *** |
| 配偶者サポート(=1) | .025 | .045 † | -.146 *** | -.143 *** | .132 *** | .174 *** |
| R ² | .012 † | .050 *** | .042 *** | .070 *** | .054 *** | .077 *** |
| Adj. R ² | .005 † | .044 *** | .036 *** | .064 *** | .048 *** | .071 *** |
| n | 1598 | 1752 | 1581 | 1739 | 1596 | 1747 |

***p<.001 **p<.01 *p<.05 †p<.1

ライフステージを示す変数である末子年齢については「末子0-6歳」を基準カテゴリーとし、各末子年齢のカテゴリーをダミー変数として投入した。以下、分析結果について順に確認していく。まず情緒的サポートについては男女で結果が大きく異なる。男性は世帯年収以外、いずれの変数も有意な関連が見られない。一方女性について見ると、ライフステージ移行に伴い配偶者以外のサポートが縮小してきていることがわかる。また配偶者のサポートが存在することは、それ以外のサポート利用可能性を高めていることが確認できる(ただし有意傾向)。つづいて金銭的サポートについては、男女でほぼ同様な結果が見られる。まず世帯年収はいずれも有意な効果が確認できない。また、情緒的サポートと同様に、

結婚初期の方が配偶者以外のサポートに恵まれており、概ね後期に移行するにしたがってサポートが縮小していくと言えるだろう。そして配偶者のサポートについては、情緒的サポートと逆の効果が確認できる。配偶者のサポートはそれ以外のサポートの利用可能性に負の効果をもたらしていた。最後に病気時サポートについて見てみると、こちらもライフステージ移行に伴い、配偶者以外のサポートが概ね少なくなってきたことがわかる。そして配偶者のサポートについては、金銭的サポートとは異なり、配偶者のサポートが存在することが、むしろそれ以外のサポート利用可能性を高めていることが読み取れる。

世帯年収については有意な関連がみられる場合とそうでない場合があったが、いずれにせよ正の効果を持つことが確認できた。そして特筆すべきことだが、再婚経験はサポートの種別にかかわらず、女性にとって夫以外のサポートを縮小させる効果があることが確認できる。また男女ともに、その時点で仕事に就いていないことと、配偶者以外のサポートとの間に有意な関連は見出すことができなかった。なおここでは示していないが、都市規模や同居人数などの変数についても分析を試みたが、有意な関連は見られなかった。

なお追加的な分析として各種サポートについて、「配偶者以外のサポート源のうち、いずれか1つ以上のサポートが期待できる」を「1」、「期待できない」を「0」とした従属変数を用いて二項ロジスティック回帰分析をおこなった（分析結果は割愛する）。なお投入した独立変数は先の重回帰分析と全く同じである。その結果、男女ともにサポートの種別に関わらず、配偶者サポートの存在は、配偶者以外のサポートの期待に負の効果を持つこと、すなわち配偶者以外のサポート利用可能性を低めることが示された。

4. 結論

本稿で得られた知見を以下にまとめよう。

第一に女性は、夫以外のサポートに恵まれているが、夫のサポートが少なかった。一方男性は、妻以外のサポートに恵まれていないが、妻のサポートが多かった。ただしこの性差は、情緒的サポートと病気時サポートに限って確認できた。第二に、有配偶者にとって夫や妻からのサポートは、サポートの種別にかかわらず最も高い割合で期待され、配偶者が重要なサポート源であることが示唆された。第三に、配偶者のサポート利用可能性はライフステージを通じて安定的に高かった。逆に配偶者以外のサポートは全体的に縮小していく傾向にあり、女性の情緒的サポートについてはその傾向が顕著であった。

最後に、配偶者のサポート有無が配偶者以外のサポートにもたらす影響について、すなわち相互排他性と両立・補完性については以下のようにまとめられる。まず金銭的サポートについては、配偶者のサポートがない場合、その他のサポート源によってニードを充足させる必要があるため、その他のサポート源の期待が大きくなる、という相互排他性説による解釈で問題ないだろう。金銭的サポートは他のサポートに比べて手段的なサポートであるが、こういった機能的特徴が相互排他性と親和的であると言えるかもしれない。

一方、情緒的サポートと病気時サポートについては以下の通り整理できる。情緒的サポートと病気時サポートについては、配偶者のサポートがあることが、その他のサポート利用可能性の総数をより増大させるという結果が、データから確認できた（男性の情緒的サポートについては除く）。よって情緒的サポートと病気時サポートについては、両立・補完性説が当てはまると言えそうだ。両立・補完性説が成立する過程としては、二通りの解釈が考えられる。まず、配偶者のサポートが利用可能であること、すなわち配偶者との良好な関係が築かれていることで、配偶者を媒介としたサポートネットワークが利用可能になるという因果的効果が考えられる。また、そもそも配偶者を含めた他者一般にサポートを期待し自己開示できる人が、配偶者以外の各サポート源にもアクセス可能であり、結果としてより多様なサポートを利用可能になるというセレクション効果についても考えられるだろう。

ただし、サポートの総数ではなく、少なくとも一か所からのサポートが利用可能かどうか（つまり、配偶者以外のサポートの有無）に着目すると上記と異なる結果が得られた。すなわち、サポートの種別にかかわらず、配偶者からのサポートの存在は、配偶者以外のサポート利用可能性を低めていた。

その他の知見としては、再婚が女性の配偶者以外のサポート構造に与える影響に着目したい。再婚女性は再婚男性に比して高いディストレスを経験することが先行研究で指摘されているが（稲葉 2002）、これは各種サポートについて共通して確認できたように、再婚女性における配偶者以外のサポートの利用可能性の低さが一因だと考えられるかもしれない。実際のところ再婚女性は、どのサポート源の利用可能性が低くなっているのかについて、より詳細に検討する必要があるだろう。

最後に今後の課題について二点触れておく。第一に、今回の分析で用いたデータ以外のデータにおいて、ライフステージ移行に伴うサポート構造の変化について更なる検討を行うことが必要だろう。例えばこれまでの NFRJ のデータで同様の結果が安定して得られるかどうか確認することは、有配偶者のライフステージ上におけるサポート構造の変動過程をより適切に理解することになるだろう。第二に、本稿で検討したサポート構造が個人のディストレスに与える影響についても併せて検討することが求められる。それらの影響を通して、配偶者のサポートの意味や文脈を理解し、再度、本稿で取り上げた相互排他性や両立・補完性について検討することが重要であると考えられる。

[文献]

- Antonucci, T.C.,1985, "Social Support: Theoretical Advances, Recent Findings and Pressing Issues" Sarason, I.G. & Sarason, B.R. (Eds.) *Social Support: Theory, Research and Applications*, Boston: Martinus Nijhoff Publishers,21-37.
- Cantor, M.H., 1979, "Neighbors and friends; An Overlooked resource in the informal support system" *Research on Aging*, 1(4): 434-463.
- Clark, M.S. & Mills, J.,1979, "Interpersonal attraction in exchange and communal relationships," *Journal of Personality and Social Psychology*, 37: 12-24.
- Cutrona, C.E.,1996, *Social support in couples: marriage as a resource in times of stress*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- 稲葉昭英, 1998, 「ジェンダーとストレス」『季刊家計経済研究』 37: 32-40.
- , 2002, 「結婚とディストレス」『社会学評論』 53(2): 69-84.
- 小林江里香, 2008, 「高齢期の社会関係」権藤恭之編『高齢者心理学: 朝倉心理学講座第 15 巻』朝倉書店, 151-169.
- Litwak, E. & Szelenyi, I., 1969 "Primary group structures and their function: Kin, neighbors, and friends," *American Sociological Review*, 34(4): 465-481.
- 野邊政雄, 2005, 「地方小都市に住む高齢女性の社会関係における階層的補完性」『社会心理学研究』 21(2): 116-132.
- 野沢慎司, 1999, 「夫の援助とネットワークの援助は競合するか?—東京郊外と地方都市における妻たちの援助動員」石原邦雄編『妻たちの生活ストレスとサポート関係—家族・職業・ネットワーク』東京都立大学都市研究所, 239-261.
- , 2001, 「核家族の連帯性とパーソナル・ネットワーク」『季刊家計経済研究』 49: 25-35.
- 相馬敏彦・浦光博, 2007, 「恋愛関係は関係外部からのソーシャル・サポート取得を抑制するか—サポート取得の排他性に及ぼす関係性の違いと一般的信頼感の影響」『実験心理学研究』 46: 13-25.
- 大和礼子, 2009, 「援助資源としての家族」藤見純子・西野理子『現代日本人の家族—NFRJ からみたその姿』有斐閣, 199-208.
- 吉原千賀, 2006, 「情緒的サポート源としてのきょうだいと家族」『第 2 回家族についての全国調査 (NFRJ03) 第二次報告書』日本家族社会学会全国家族調査委員会, 198-207.

The Structure of a Married Person's Social Support

Yoshiharu DAINICHI

Tokyo Metropolitan University

In this paper, we examined the structure and characteristics of a married person's social support. First, we did descriptive analyses and found findings as follows: though women had more support from other than their husbands, their husband's support tended to be insufficient. Conversely, men had more support from their wives, but their support from other than their wives tended to be insufficient. These gender differences were found for both emotional support and emergency support. And we found that spousal support was the most important support to individuals than any other support regardless of their functional types. In addition, spousal support was quite stable throughout the life-stages.

And then, we examined the effect of spousal support on support from other sources. As for financial support, lack of spousal support expanded other support. This relationship was mutually exclusive. In contrast, regarding emotional support and emergency support, having spousal support increased other support (except for men's emotional support). Multivariate analyses showed that having no spousal support increased the probability of having other support, regardless of support functional types. Finally, we found that remarried women tended to have less support from other than their husbands.

Key words and phrases: social support, spousal support, support from other than spouse, life-stage, gender differences

